

青森市埋蔵文化財調査報告書 第41集

野木遺跡

発掘調査概報



平成9年度

青森市教育委員会

序

青森市内では、ここ数年来、開発行為による埋蔵文化財包蔵地の発掘調査が相次いでおります。

青森市教育委員会では、今年度、県埋蔵文化財調査センターと合同で市内野木に所在いたします野木遺跡の発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、平安時代を中心とする数多くの住居跡が見つかり、大規模な範囲にわたる集落跡であることが判明いたしました。

本書は、昨年度刊行いたしました桜峯(1)遺跡概報と同様に研究者はもとより、市民の皆様に埋蔵文化財に対しより親しみをもっていただけるよう写真図版等を盛り込んだ発掘調査概報として刊行することにいたしました。

本書が埋蔵文化財の保護・活用、地域の歴史学習等に役立つことができれば幸いと存じます。

最後になりましたが、関係機関並びに各位からのご指導、地元各町会からのご協力、さらに工事主体者である地域振興整備公団のご理解に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成 10 年 3 月

青森市教育委員会

教育長 池 田 敬

例 言

1. 本書は、青森市教育委員会が平成 9 年度実施した青森中核工業団地造成工事に係る野木遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 野木遺跡の遺跡番号は、01210 である。
3. 本書で報告する遺跡は、地域振興整備公団の委託を受けて青森市教育委員会が平成 9 年度に発掘調査を実施した部分についてのものである。
4. 発掘調査は平成 10 年度に継続で実施される予定であり、調査全体の報告については、平成 11 年度、12 年度の 2 カ年次にわたって刊行する予定である。
5. 本書の執筆は、調査担当者である木村淳一、設楽政健が分担しておこなった。
6. 発掘調査の実施にあたって次の機関からご指導・ご協力をいただいた。
青森県教育庁文化課、青森県埋蔵文化財調査センター

目 次

| | |
|---------------------|----|
| はじめに..... | 1 |
| 野木遺跡とは..... | 2 |
| 今年度の調査から..... | 4 |
| 遺構からみた人々の生活..... | 6 |
| 住居..... | 6 |
| 土坑..... | 8 |
| 竪穴遺構..... | 9 |
| コラム～かまどのいろいろ～... .. | 9 |
| 遺物からみた人々の生活..... | 10 |
| 野木遺跡と鉄..... | 11 |
| まとめ..... | 12 |
| 報告書抄録..... | 13 |

はじめに

青森県商工労働部は、青森県における産業構造の高度化ならびに人口定住の促進を図るために青森テクノポリス開発計画を計画し、産業振興の拠点として、地域振興整備公団と県との共同事業による青森中核工業団地造成を青森市大字野木・合子沢地区に計画しました。

開発予定地内には、平成5・6年度に青森県教育委員会が実施した分布調査によって範囲の拡張がされた新町野遺跡、平成5年度に新しく発見され、縄文時代と平安時代の遺跡として登録された野木遺跡が存在することがわかりました。

平成7年度からの造成工事の着手の計画があったため、開発予定者である地域振興整備公団並びに県工業振興課と県教育庁文化課との間で協議を行い、協議の結果、平成7年度から青森県埋蔵文化財調査センターが試掘調査を実施することになりました。

試掘調査の結果、約17万5千㎡が調査対象範囲と判明し、翌平成8年度からは、試掘調査の結果を基に最優先部分について事前に発掘調査が必要となり、県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施しました。

当初調査終了年度が平成11年度の予定でしたが、平成9年4月に地域振興整備公団並びに県工業振興課の要望により平成10年度終了に変更となり、その協議の段階で青森市教育委員会が加わり、新町野遺跡の幹線及び補助幹線道路部分と野木遺跡の南側の遺構密集地区ならびに西側部分の試掘調査を青森県埋蔵文化財調査センターが調査を担当し、野木遺跡の北側幹線道路部分を青森市教育委員会が調査を担当することになりました。

青森市教育委員会では、埋蔵文化財の保護と開発事業との円滑な調整を図るため、調査を受託し、平成9年5月12日から11月21日まで発掘調査を実施しました。

本書は、青森市教育委員会が平成9年度に実施した野木遺跡の発掘調査から概要について報告させていただきます。



野木遺跡（真上から）

野木遺跡とは

野木遺跡は、青森市の中心部から約8km離れた青森市大字野木字山口にあります。遺跡の立地は、青森市南部にそびえ立つ八甲田山からのびる火山性の台地上標高50m～90mに位置しています。

この遺跡は、平成5年度に青森県教育委員会が実施した分布調査によって、その所在が確認され、平成7年度からの県埋蔵文化財調査センターによる試掘調査によって、縄文時代と平安時代の^{たてあなじゆうきよあと}竪穴住居跡や土坑等の遺構、縄文時代と平安時代の土器などの遺物が見つっています。

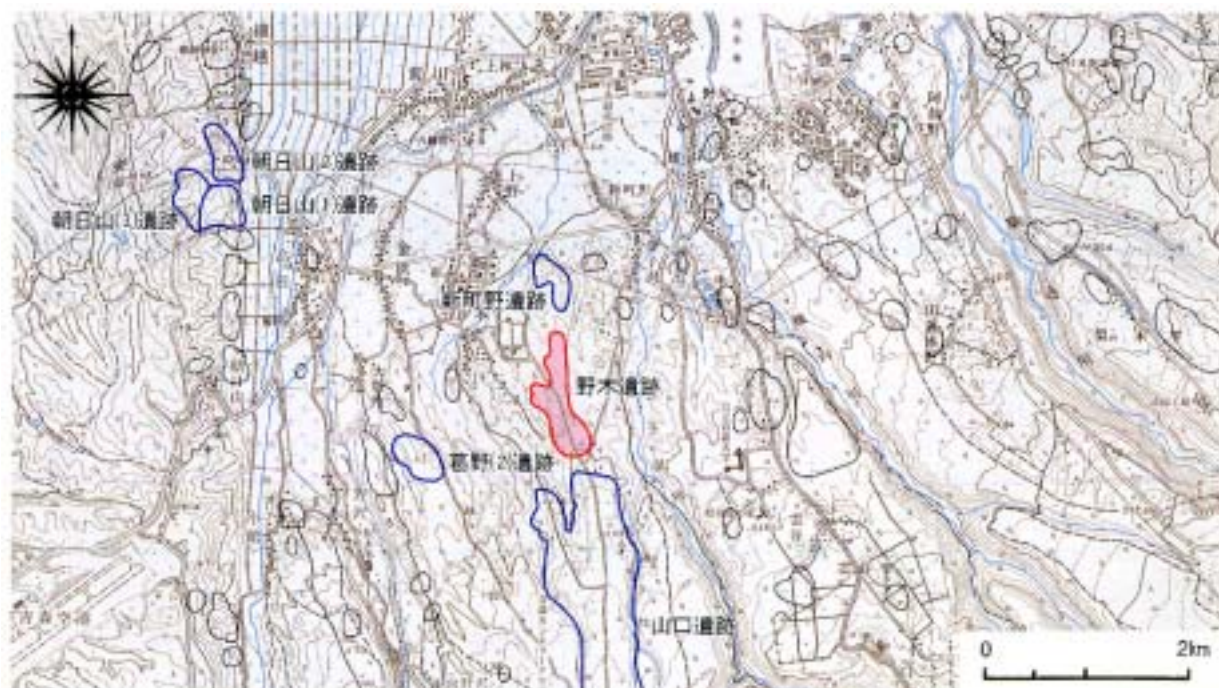
地形的に見た場合、野木遺跡が立地する火山性台地は、^{うしだてがわ}牛館川と^{ごうしざわがわ}合子沢川に切り開かれた丘陵ということになります。

この丘陵の平野部に近い北に約1km離れた地点には^{しんまちの}新町野遺跡が立地しています。この遺跡は、野木遺跡と同じように縄文時代と平安時代の集落遺跡で遺跡の南半分については、県埋蔵文化財調査センターが調査を、また北半分の西側については、青森市教育委員会が平成8年度に試掘調査を、平成9年度には東側の一部について発掘調査を実施しています。

野木遺跡の南側には、山口遺跡と呼ばれる野木遺跡より広大な遺跡が確認されています。この遺跡は、縄文時代と平安時代の遺物が採集されていますが、本格的な発掘調査は実施されていません。

牛館川を隔てた隣の丘陵上には、^{くずの}葛野(2)遺跡があります。平成8年度に青森市教育委員会で一部の地区について発掘調査を実施しています。調査の結果、平安時代の遺構を中心に縄文時代の土器・石器、平安時代の土師器・須恵器などが見つっています。

入内断層を境とする西部の丘陵上にも数多くの平安時代の遺跡が確認されています。このうち、^{あさひやま}朝日山遺跡では、野木遺跡とほぼ同時期の竪穴住居跡などが見つっており、朝日山(3)遺跡では、竪穴住居跡に^{がいしゅうこう}外周溝と^{ほったてばしらたてものあと}掘立柱建物跡がセットの住居跡などが見つっています。



野木遺跡と周辺の遺跡位置図

野木遺跡で主に人々の生活が営まれたのは、今から1,100年前～1,000年前の平安時代中期にあたります。

その当時、都は平安京にあり、地方にはその役所である官衙^{かんが}が設置されていましたが、律令国家の外の地域には、9世紀になって城柵^{じょうさく}が秋田県中部、岩手県中部まで設置されていました。同時代の青森県や秋田県北部、岩手県北部には、朝廷の勢力が及んでいませんでした。

この地域に勢力が及んでいなかった背後には蝦夷^{えみし}と呼ばれる集団の存在があげられます。朝廷は、7世紀から勢力の及んでいなかった東北地域への進出のために新潟県に淳足柵^{ぬたりさく}（647年）、ついで磐舟柵^{いわふねさく}（648年）を設置し、8世紀前半には、日本海側では出羽柵^{でわさく}（709年）、太平洋側では多賀城^{たがじょう}（737年）と北進し、9世紀前半には、日本海側の北端で秋田市の秋田城、太平洋側の北端で現在の盛岡市に所在する志波城^{しわじょう}まで勢力が及んでいました。



城柵関連遺跡の分布

| 時代 | 西暦 | 主なできごと | 津軽地方の集落 野木遺跡 |
|------|---------------------|------------------------------------|--------------|
| 平安時代 | 794 | 都を平安京に移す | |
| | 797 | 奥上田村集落、葦刈天降塚となり | |
| | 803正月 | 奥上田村集落、藤原城（現在の岩手県水沢市）を築く。 | |
| | 4月 | 郡司の誘致、河内島を建設する。 | |
| | 7月 | 奥上田村集落、河内島を、母丸を築いて入居する。 | |
| | 8月 | 河内島を、母丸を築き上げる。 | |
| | 803 | 奥上田村集落、志波城（現在の盛岡市）を築く。 | |
| | 805 | 藤原朝綱の意見により河内島の軍事と造作（平安京の造営）を停止させる。 | |
| | 808 | 鎮守寺（軍事の拠点）を多賀城から郡司城に移す。 | |
| | 811 | 水害のため、志波城を移す。 | |
| 813 | この頃、磐舟柵（岩手県矢野町）を造営。 | | |
| 815 | 城柵（山形県酒田）設置。 | | |
| 10世紀 | 878 | 出羽国野原庄に、林井城築上。津軽蝦夷志波（元慶の乱） | |
| | 915 | 千栗岡を火災破壊終了 | |
| | 923 | 白瀬石火災破壊終了 | |
| | 929 | 出羽国野原庄の火災 | |

古代の津軽地方で人々が生活を営み始めたのは、今のところ8世紀前半になってからと捉えられています。

8世紀後半には、一時期に10軒ほどの住居で構成される集落が浅瀬石川以南の丘陵上に作られ始めます。

9世紀前半になると津軽平野の北側にも集落が広がってきます。浪岡町にある野尻^{なみのかまち}（2）遺跡、山元^{のじり}（2）遺跡などが代表的遺跡です。

9世紀後半には、五所川原に須恵器の窯が作られ、新しい集落が急増し始めます。野木遺跡もほぼこの時期に集落が作られた可能性が高いものと思われます。

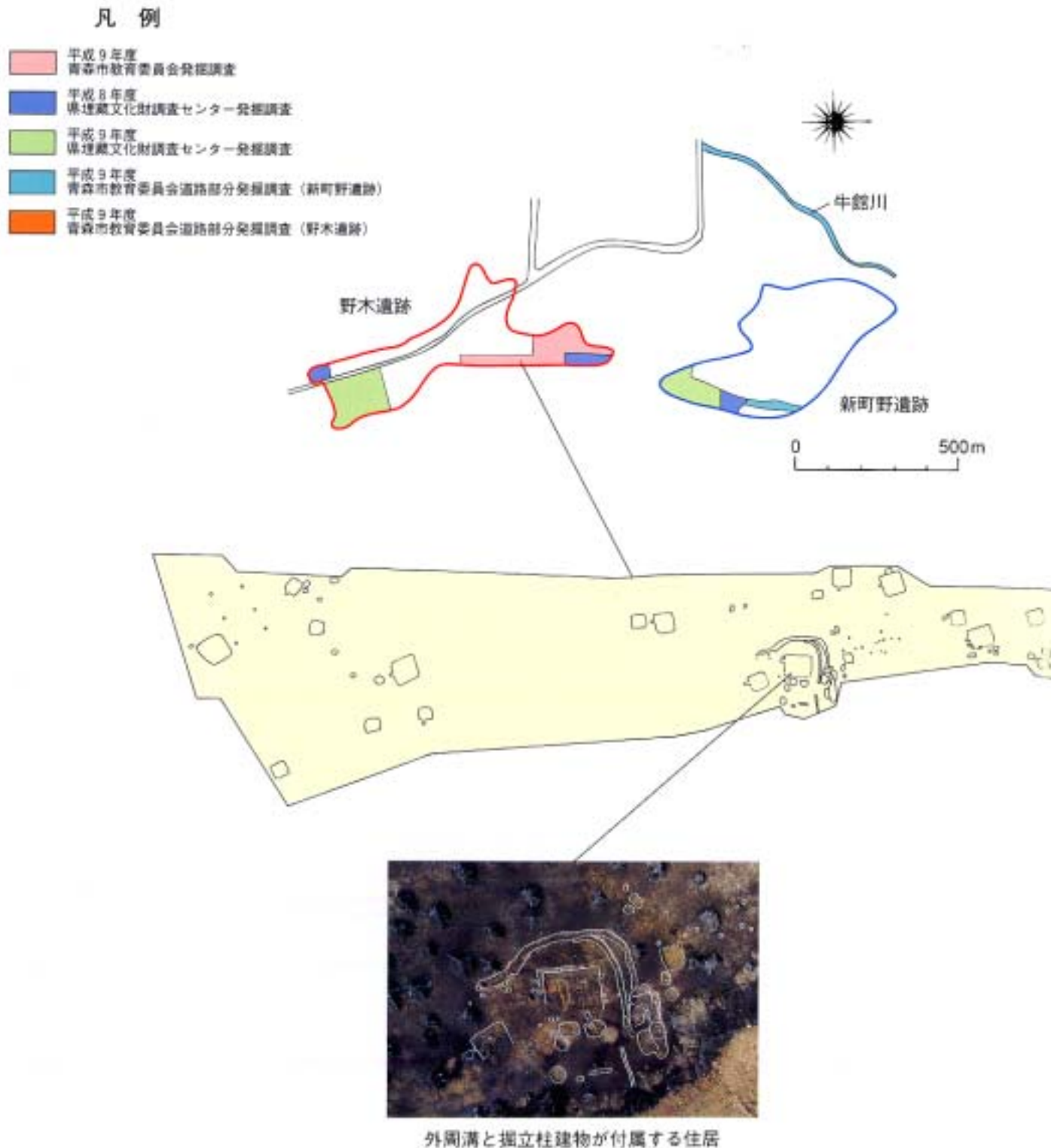
10世紀前半には、さらに集落の規模、範囲が拡大して津軽半島まで集落が確認されています。野木遺跡の人々も多くの住居をつくり、土器づくりや鉄づくりをしていたようです。

このように野木遺跡は、津軽地方の人々の動きのなかで集落ができ、人々の生活が営まれていたようです。

今年度の調査から

今年度、青森市教育委員会で実施した野木遺跡の発掘調査は、北側の約24,000㎡について平成9年5月12日から11月21日まで実施しました。

調査の結果、竪穴住居跡85軒（縄文時代1軒、平安時代84軒）、土坑140基、竪穴遺構30基、小ピット212基、溝跡19条、縄文時代の陥し穴2基が見つかり、平安時代の土器を中心とした遺物が段ボール約110箱分出土しました。





火災にあった住居（焼失住居）



0 20m



床面、壁面が赤く焼けた土坑（焼成土坑）

遺構からみた人々の生活

柱穴



柱が立っていた穴の跡。

腰板



壁と思われる板材。

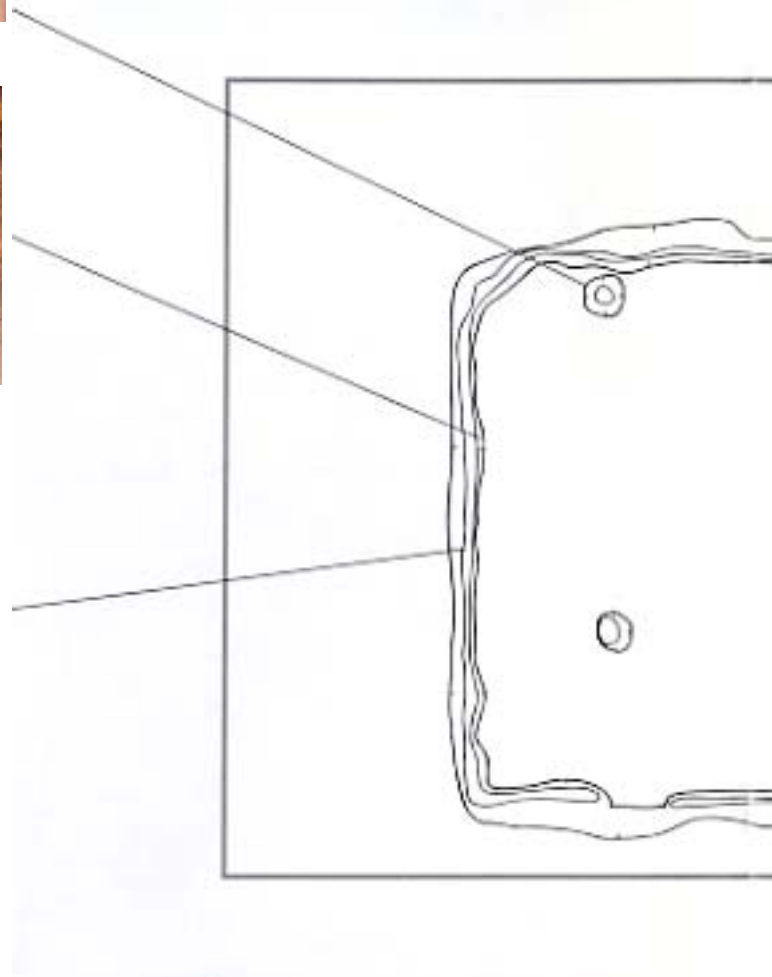
壁溝



住居の壁際を巡る溝。壁となる板材をすえる溝であるとともに、住居内に水がたまらないように設けられたと考えられます。

住居

今年度、野木遺跡の調査ではたくさんの竪穴住居跡が見つかりました。竪穴住居跡とは、地面を掘り込んで、床面とし、柱を立て、上部に壁や屋根を構築した家の跡のことです。今から約1,000年前の住居ですから、柱、壁、屋根等の部材が出土することは特別な場合を除いてほとんどありません。その特別な場合のひとつが、焼失住居です。このような焼けた住居は、家屋の部材等が焼け落



いろいろな住居



大きな掘り込みをもつ住居

住居のほぼ中央部に、楕円形の掘り込みをもつ住居です。土の堆積状況からみて、この掘り込みは、住居と同時代に存在していたと考えられます。何らかの作業をおこなっていた場所と考えられます。



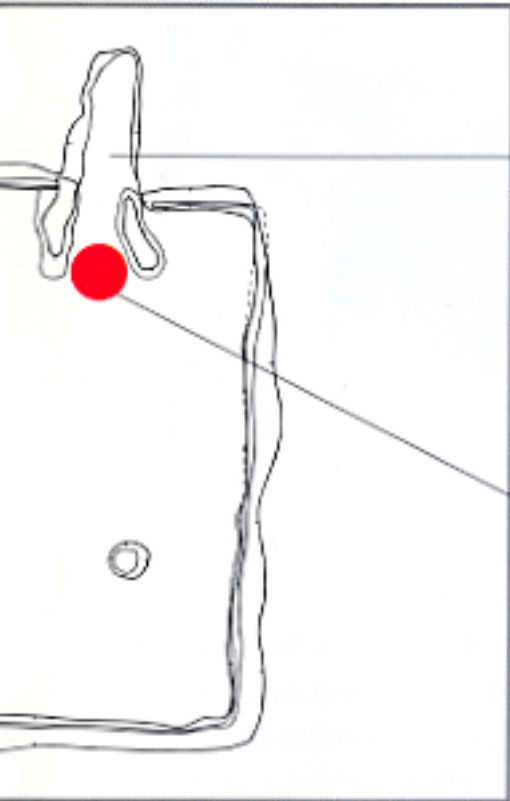
外周溝と掘立柱を伴う住居

竪穴住居跡の周囲を大きな溝が巡り、溝が開口している部分に近接して、柱穴が2列見つかっています。

ちて炭化したことによって、腐らずに残っており、私たちが当時の住居を考えるうえでの貴重な情報を提供してくれます。発掘調査において、通常、私たちが目にすることができるものは、当時の住居を構成していた要素の中の、限られた部分なのです。しかし、その限られた部分から、当時の人々がくらしていた住居がどのようなものであったかある程度推測することができます。



火災にあった住居（焼失住居）



かまど

火を焚いて、調理などを行っていた場所です。住居の壁際のどちらかに偏った所に構築されます。



燃烧部

かまどで、火が焚かれていた部分です。長い年月を経た現在でも、このように焼けた場所が赤く残っているのがわかります。



ロクロピットをもつ住居

住居の中央部から北東よりにロクロを設置していたと考えられる穴が見つっています。底が平坦な穴の中央部に断面が四角柱状の穴がありました（白矢印）。集落内で使用された土器を、ここで作っていたのかも知れません。



土 坑

平安時代の野木遺跡に生活していた人々は、住む家を作る以外に様々な施設をつくるために地面を掘りこんでいます。

発掘調査で見つかる土坑^{どこう}と呼ばれる遺構は、そのような施設の一つであると推定され、同じような形態を持っていたとしても彼らが目的とする用途の違いによって、使われかたが異なっているようです。現在の私たちは、彼らが使い終わったあとの状態から、その当時の使われかたを推定することしかできません。その推測のための資料として、形、土の堆積（つもり方）の状況や土質（混入している炭や火山灰）、中から出土する遺物、床面や壁面の状況などを利用します。

今年度の調査では、断面が袋状（フラスコ）を呈する土坑が2基見つかっています。断面形がフラスコ状を呈する土坑は、北東北では縄文時代に多く見られる形ですが、平安時代にも数的に多くありませんが存在します。縄文時代のフラスコ状土坑の用途は、一般に貯蔵穴、再利用されてのお墓として考えられています。野木遺跡から見つかった土坑は、斜面の高い方に向かって掘り込みを深くしていますが遺物などが出土していないことから明確に用途を推定するまでには至っていません。



平安時代のフラスコ状土坑

また、床面・壁面が赤く焼けた円形・長方形の土坑が数多く見つかっています。当時の人々が土器づくりの際、土師器を焼く窯として利用したり、鉄をつくる際に利用する木炭を作るための窯としての用途が考えられます。それぞれのものを作るために必要とされる温度が異なるため、土坑に残っている赤く焼けた面の残り方が異なります。今年度当委員会が道路改良事業で発掘調査を実施した地点からは、土器を焼いた際の失敗品が捨てられた土坑が見つかっています。当時野木遺跡の中で生活していた人々は、自分たちで土器づくりを行っていたことを示す資料であると言えます。



床面、壁面が赤く焼けた土坑（焼成土坑）



土器を焼いた際に失敗品を捨てた土坑
（道路改良事業地区）

竪穴遺構

竪穴遺構と呼ばれる遺構は、住居のようにかまどをもたず、土坑より規模の大きな遺構のことです。生活の場として利用するのではなく、作業を行うための小屋や、倉庫としての機能が想定される施設です。野木遺跡からは、30基の竪穴遺構が見つかりました。中には、作業台として利用されたと思われる自然礫が床面から見つかった例もあります。



竪穴遺構

コラム～かまどのいろいろ～

竪穴住居跡の発掘を行うと、住居の一边に赤く焼けた土が見える箇所があります。これは、住居のなかで、火を焚いて、主に調理を行うための「かまど」と呼ばれる場所です。現在の私たちの家庭でいう台所のような役目をしていました。

かまどは、天井と奥の壁に穴のあいたかまぐらのように土を積み上げて、天井の部分に甕を据え、内部の空洞の部分（たきぐち焚口）で火を焚き、奥壁にあいた穴とつながる「煙道」という穴で、煙を住居の外に逃がすというような構造です。この住居の外に煙を逃がすための「煙道」という穴には、それぞれの住居によって、「トンネル式」、「半地下式」のような種類があり、これは住居が構築された時期の差であると考えられます。また、かまどの壁である「そで」という部分を補強するために、土師器、羽口、礫などが「しんざい芯材」として利用されている例も数多く見られます。

野木遺跡では、かまどが住居の南東側の壁に構築される場合、東側に構築される場合と、大まかに2パターンに分けることができます。風向きなどを考えて、時期によってかまどを構築する場所に規則性があったものと考えられます。



「トンネル式」の煙道をもつかまど



「半地下式」の煙道をもつかまど



土器や羽口、礫を芯材としたそで

遺物からみた人々の生活

平安時代の野木遺跡で生活していた人々が使っていた道具は、バラエティーに富んでいます。煮炊きをする際には、土師器の甕、広口の浅い埴などが利用され、食事をする際には、土師器の坏、皿、須恵器の坏などのお椀や皿を利用して食事をしていたようです。土師器の場合ほとんどは、遺跡内で作って使用していたようですが、須恵器と呼ばれる灰色の陶器は、五所川原で当時操業されていた窯から製品を調達して使っていたようです。

そのほか、他地域で作られた須恵器も入手して使っていた可能性があります。

また、土師器の甕においても、タタキ目を持つ破片が見つっています。土師器の甕にタタキ目を入れる技法は、当時北陸地方から日本海側を通して伝わった技法で、北陸系甕・出羽甕と呼ばれています。

北陸地方や出羽地方から直接製品として野木遺跡に入ったわけではありませんが、技術を知っている人々が作った製品が須恵器と同じように野木遺跡にもたらしたものと思われる。タタキ目を持つ甕は、浪岡町の遺跡からも出土しています。

また、その当時、文字を知っている人々が野木遺跡には住んでいたようです。

墨を使って土器の表面に文字や記号を書き入れる行為を野木遺跡出土の土器から読みとることができます。

この土器は墨書土器と呼ばれ、平安時代の律令国家の人々は、食膳具に自分の所有を表すためや、おめでたい言葉を書き入れたりしていましたが、律令の及んでいない北東北においてもその行為を知った人々がいたようです。

土器以外にもさまざまな道具を野木遺跡の人々は使っています。土器は、土の中に眠っていても腐ったり、朽ち果てることはありませんが、木や鉄は、朽ち果てたりさびてしまっ、かならずしもその当時のそのまま見つかる例は限られます。

野木遺跡の住居からはさまざまな鉄製品が見つっています。農耕具の鋤先、鎌や、刀子（ナイフ状のもの）、金箸、糸を紡ぐための紡錘車などが見つっています。

また、木製品では、炭化した状態でしたが編み物をする際に利用されるこも槌が1点出土しています。

鉄を作る際に送風管として利用される羽口も多量に出土しています。鉄を作る際の送風管の状態出土した例はありませんでしたが、再利用され、かまどをつくる際の芯材として見つかる例が数多く確認されています。



野木遺跡から見つかった土師器・須恵器



タタキ目がある土師器



墨で文字が書かれた土師器



炭化したこも槌（木製のおもり）



鋤先

野木遺跡と鉄

今年度の野木遺跡の発掘調査では、いくつかの鉄製品、かなりの量の鉄滓^{てつさい}が出土しており、また鉄生産に関係すると思われる遺構もいくつか見つかっています。このことから、野木遺跡では、自分達の集落で鉄を生産し、それを材料として、刃物、鋏先などの製品を作っていたことが考えられます。

当時の人々は、どのようにして鉄を作り出していたのでしょうか。当時の人々が鉄を作り出す作業工程は、大まかに次のように考えられます。

- 1 砂鉄^{さてつ}や鉄鉱石^{てつこうせき}を原料として炉^ろ（製鉄炉^{せいてつろ}）の中で、熱することにより、銑鉄^{せんてつ}（炭素などの不純物がたくさん入っている。鑄造鉄器^{ちゅうぞうてつき}の原料となる）を作る。
- 2 1の工程で作られた、不純物がたくさん入っている鉄を炉^{せいろ}（精錬炉^{せいれんろ}）の中で熱し、その鉄に作業を施すことによってさらに純度の高い「鋼^{はがね}」を作り出す。
- 3 鋼^{かじろ}を炉^ろ（鍛冶炉^{かじろ}）の中で熱し、それを打ち鍛え、整形することによって製品を作る。

集落における鉄生産を考える上で次のようなパターンが考えられます。原料の調達 1の作業 2の作業 3の作業まですべて1つの集落内で行われるパターン、鉄が他の場所から運ばれて、2の作業 3の作業が行われるパターン、鋼が他の場所から運ばれて3の作業だけが行われていたパターンの3つです。これらのパターンのうち、野木遺跡はどのパターンに当てはまるのかは、とても重要な問題です。

このようないくつかの問題を考える材料となるのが遺跡から見つかる遺構や遺物です。残念ながら、今年度の調査では炉は見つかっていないため、集落内で行われていた鉄生産の工程について、詳しいことは不明ですが、炉に風を送るための羽口^{うへき}や炉壁^{ろへき}と思われる遺物が見つかることから、来年度の調査で製鉄炉、精錬炉のいずれか、もしくはその両方が見つかるかもしれません。



野木遺跡から見つかった鉄製品



多量の鉄滓を捨てた土坑



鍛造剥片



炉壁

まとめ

野木遺跡は、縄文時代と平安時代に人々の生活が営まれました。このうち、今から1,100～1,000年前の平安時代中期には、標高50m～90mの丘陵上に数多くの住居を建てて生活を営んでいたようです。

今年度、青森市教育委員会が実施した発掘調査では、北地区約24,000㎡について発掘調査を行い、竪穴住居跡85軒、竪穴遺構30基、土坑140基などが見つかりました。集落は、広大な土地を利用して、住居や土坑を作っていて、建て替えなどの際には、極力同じ土地に建て替えるよりは、近くに住居などが建っていない土地を利用していたようです。

南側の県埋蔵文化財調査センターが調査を実施している地区では、同じ土地の上に何度も住居を建て替える例が多く見られます。時期的には同じですが、集落として見た場合、南地区には、同じ土地にとどまる方が何らかの利点があった可能性があると思われます。

北地区から南地区にかけては、本年度調査した地区と同じように住居が存在することが確認されています。しかし、南側の密集地区への途中で北地区とのムラとムラとの境があったのかもしれませんが。

平成10年度には、青森市教育委員会では、本年度調査を実施した北地区から南地区に向かって発掘調査を継続で実施する予定です。境界についても、発掘調査によって明らかになるものと思われます。

また、野木遺跡では、さまざまな遺物が見つっています。その当時の人々が生活するために使ったものや、使うために生産したものがみつっています。このうち、鉄の生産に関する遺物が多くみつっています。本年度の調査では、明確な炉はみつっていませんが、今後継続する発掘調査によって見つかる可能性を持っています。



発掘作業風景

報 告 書 抄 録

| | | | | | | | | | |
|--------------|--|-------------------|-------|-----------------|-----------------------------|---------------------------|------------------------|---|-----|
| ふりがな | のぎ いせき はくつちょうさがいほう | | | | | | | | |
| 書名 | 野木遺跡発掘調査概報 | | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 青森市埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第41集 | | | | | | | | |
| 編著者名 | 木村淳一、設楽政健 | | | | | | | | |
| 編集機関 | 青森市教育委員会 | | | | | | | | |
| 所在地 | 〒030-8555 青森県青森市中央一丁目22-5 TEL 0177-34-1111 | | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 1998年3月31日 | | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡 | ふりがな 名所在地 | コ ー ド 市町村 遺跡番号 | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 | |
| のぎ 野木 | あおもりしおおあざ 青森市大字 のぎあざやまくち 野木字山口 | 02201 | 210 | 40° 50 38 | 140° 45 15 | 19970512 、 19971121 | 24,000 | 工業団地造成 (青森中核工業 団地造成工事) に伴う事前調査 | |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 野木 | 集落跡 | 縄文 平安 | 竪穴住居跡 | 85軒 | 土 須 鉄 土 19 条 | 師 恵 製 製 | 器 器 品 品 器 | 竪穴遺構 | 30基 |
| | | | 土坑 | 140基 | | | | | |
| | | | 小ピット | 212基 | | | | | |
| | | | 溝跡 | | | | | | |
| | | | Tピット | 2基 | | | | | |

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

| | | | |
|---------------|------|------------------------|------------------------------------|
| 青森市の文化財 | 1 | 1962 『三内霊園遺跡調査概報』 | 青森市埋蔵文化財調査報告書 |
| '' | 2 | 1965 『四ツ石遺跡調査概報』 | '' 第22集 1994 『小三内遺跡発掘調査報告書』 |
| '' | 3 | 1967 『玉清水遺跡調査概報』 | '' 第23集 1994『三内丸山(2)・小三内遺跡発掘調査報告書』 |
| '' | 4 | 1970 『三内丸山遺跡調査概報』 | '' 第24集 1995 『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』 |
| '' | 5 | 1971 『野木和遺跡調査報告書』 | '' 第25集 1995 『市内遺跡詳細分布調査報告書』 |
| '' | 6 | 1971 『玉清水 遺跡発掘調査報告書』 | '' 第26集 1995 『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』 |
| '' | 7 | 1971 『大浦遺跡調査報告書』 | '' 第27集 1996 『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』 |
| '' | 8 | 1973 『孫内遺跡発掘調査報告書』 | '' 第28集 1996 『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』 |
| | | 1979 『蛭沢遺跡』 | '' 第29集 1996 『市内遺跡詳細分布調査報告書』 |
| | | 1983 『四戸橋遺跡調査報告書』 | '' 第30集 1996 『小牧野遺跡発掘調査報告書』 |
| 青森市の埋蔵文化財 | | 1983 『山野峠遺跡』 | '' 第31集 1997 『市内遺跡詳細分布調査報告書』 |
| '' | | 1985 『長森遺跡発掘調査報告書』 | '' 第32集 1997 『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』 |
| '' | | 1986 『田茂木野遺跡発掘調査報告書』 | '' 第33集 1997 『新町野遺跡試掘調査報告書』 |
| '' | | 1987 『横内城跡発掘調査報告書』 | '' 第34集 1997 『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』 |
| '' | | 1988 『三内丸山 遺跡発掘調査報告書』 | '' 第35集 1997 『小牧野遺跡発掘調査報告書』 |
| 青森市埋蔵文化財調査報告書 | | | '' 第36集 1998 『桜峯(1)遺跡発掘調査報告書』 |
| '' | 第16集 | 1991 『山吹(1)遺跡発掘調査報告書』 | '' 第37集 1998 『新町野遺跡発掘調査報告書』 |
| '' | 第17集 | 1992 『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』 | '' 第38集 1998 『野木遺跡発掘調査報告書』 |
| '' | 第18集 | 1993 『三内丸山(2)遺跡発掘調査概報』 | '' 第39集 1998 『市内遺跡詳細分布調査報告書』 |
| '' | 第19集 | 1993 『市内遺跡発掘調査報告書』 | '' 第40集 1998 『小牧野遺跡発掘調査報告書』 |
| '' | 第20集 | 1993 『小牧野遺跡発掘調査概報』 | '' 第41集 1998 『野木遺跡発掘調査概報』 |
| '' | 第21集 | 1994 『市内遺跡詳細分布調査報告書』 | '' 第42集 1998 『熊沢遺跡発掘調査概報』 |

青森市埋蔵文化財調査報告書 第41集

野木遺跡発掘調査概報

発行年月日 平成10年3月31日

発行 青森市教育委員会

〒030-8555 青森市中央一丁目22-5

TEL 0177-34-1111

印刷 第一印刷株式会社

〒038-0003 青森市石江字江渡3-1

TEL 0177-82-2333